

# 台湾人学習者の相づち使用 — 「そう系」を中心に —

張 晉璋

## 1. はじめに

日本語学習者にとって相づちの使用は難しいと考えられている。筆者の日本語学習経験では、授業であまり相づちを教わっていない。相づちをどのように打つのが適切であるかを取り上げる研究はまだ少ないと思われる。本研究では、特に筆者自身が難しいと考えた「そう系」相づちに注目したい。

台湾人日本語学習者の相づち使用に関する研究の中で、「そう系」相づちの使用の問題がよく取り上げられる(新井 2000, 柳 2003, 陳 2003 など)。例えば、以下の日本語母語話者 A と台湾人学習者 B の会話で、A の個人的な意見に対する B の「そうそう」という相づちは不自然に感じられる。

A: ナナさんは一見静かだけど、実はすごく積極的な人だと思う。

B: そうそう。 (筆者作例)

この例では、B が「そうだね」と言ったほうが自然であろう。本研究では台湾人学習者を対象とし、台湾人学習者の「そう系」相づち使用における問題を明らかにすることを目的とする。

## 2. 先行研究

### 2.1 日本語の「そう系」相づちに関する先行研究

大浜 (2006) は、小宮 (1986) の分類に従い「そう系」相づちを概念的表現に分類している。「そう系」についてさらに「主張型」、「同意型」、「受入型」という3つの型を区別し、以下のように整理した。

- ①「主張型」: 言い切り、あるいは文末に「よ」を取るものである。「そう」「そうだよ」「そういうこと」「そうなんです」などがある。
- ②「同意型」: 文末に「ね」を取るものである。「そうよね」「そうですね」「そうな

んだよね」などがある。

- ③「受入型」: 主張型と同意型以外で「かな、かも、かね、か、の等」を含むものである。「そうかも、そうかな、そうなんだ、そうなの」等がある。

### 2.2 台湾人学習者の「そう系」相づち使用に関する先行研究

新井 (2000) では台湾人学習者に見られた違和感を覚える相づちとして以下の例を提示している。

(例) [学習者と教師の雑談]

学習者: 先生は台南へ行ったことがありますか。

教師: ええ、ありますよ。私ね、台南が大好きなんですよ。

学習者: はい、そうです。台南は文化の町です。

ここで、新井 (2000) は、この場合に学習者が使用した「はい、そうです」の代わりに「ああ、そうですか」と応答したほうが適切だと述べた。しかし、何故学習者がそのように間違えたか、また、「そうです」と「そうですか」の具体的な違いは何かについては詳しく説明していない。

また、柳 (2003) は、電話会話をデータとして台湾人学習者が概念的表現について「そうですか」「そうです」のような「そう系」相づちを主に使っていると述べている。

## 3. 研究方法

### 3.1 相づちの定義

小宮 (1986) は、相づちを「応答表現の中で、話し手の発話に対し、自由意志に基づいて、肯定・否定の判断を表明することなく、単に聞いている・分かったという意味で用いられるもの」と定義した。メイナード (1993) は、「話し手が発話権を行使している間に聞き手が送る短い表現」と相づちを定義

した。しかし、大浜（2006）は、メイナード（1993）の定義は英語圏のバックチャンネルについて妥当であっても、日本語の相づちを取り扱うには、適切ではないと述べ、「話し手が発話権を行使している間」という出現位置に関する条件を設けていない。また、相づちが聞き手のものだけではないと述べている。

楊（1997）は、中日両言語の会話を調べることで、広い意味で会話の進行を促したり助けたりする機能を持つものを相づちとして取り扱って、「話し手が発話権を行使している間に、または話し手の発話が終了した直後に、聞き手が会話の進行を促したり助けたりするために、自由意志に基づいて送る表現である。」とし、「話し手からの質問のような積極的な応答の求めに対する答えは相づちではないと認められている。」と相づちを定義した。

本研究は日本語学習者を対象として調べることで、広い意味で相づちを取り扱いたい。小宮（1986）、楊（1997）と大浜（2006）を参考にし、本研究における相づちの定義は、「相づちとは、会話の進行を促したり助けたりするために、自由意志に基づいて送る表現である。」と定義した。

「そう系」相づちとは、「そう」という形式を含む相づち表現である。

### 3.2 研究課題

台湾人学習者は「そう系」相づちを使い分ける上でどのような問題が見られるか。

### 3.3 データ

データには、2009年6月に収集した上級台湾人学習者と日本語母語話者初対面会話2組を用いた。どちらも20分間の自由会話である。本研究ではそのうち、上級台湾人学習者の発話を分析対象とする。

日本語母語話者を含め、会話参加者の個人情報（仮名）のリストは表1の通りである。

表1 会話参加者の個人情報リスト

会話参加者	年齢	母語	日本語能力	日本滞在歴	
第1組	王	22	中国語	1級	9ヶ月
	鈴木	20	日本語		
第2組	劉	26	中国語	1級	15ヶ月
	中村	24	日本語		

### 3.4 分析方法

収集されたデータを文字化し、学習者の「そう系」相づちを取り出して、前後の文の内容を見ながらその相づちの適切性を検討した。相づちの適切か否かの判断としては、まず日本語のネイティブスピーカー2人に見てもらい、学習者の不適切な「そう系」相づちを取り出して、その間違えたところを大浜（2006）にある「そう系」相づちの3つの型と対照しながら分析した。

### 4. 結果

まず、王と劉の使用した「そう系」相づち表現の使用数及び、それらのうち不適切な使用と判断された回数を表2で表す。

表2 学習者の「そう系」相づち表現

そう系相づち	王		劉	
	全体の 使用回 数	不適 切な 使用 回数	全体の 使用回 数	不適 切な 使用 回数
そう	11	2	7	1
そうそう	11	3	2	1
そうそうそう	10	1	1	
そうそうそうそ う	1			
そうそうそうそ うそうそう	-	-	4	1
そうか	5		3	
そうね	5			
そうだね・そ うですね	4	2	12	4
そうなんだ	3			
そうですよ			2	1
そうです			1	
そうだよね・そ うですよ			4	
合計	49	9	36	7

◎回数なしの場合は「-」で表す

表2から学習者の「そう系」相づちの使用のうち「そう」「そうそう」「その重なる形」「そうだね・そうですね」という使用に問題があることが分かった。以下、学習者が聞き手となる場合と学習者が話し手となる場合とを、二つに分けて検討していきたい。

#### 4.1 学習者が聞き手となる場合

##### 会話例1 (関西弁を教えることについての話)

- 293 王：じゃ今関西弁とか使わない？
- 294 鈴木：関西弁 うん 何か関西の友達と話す時は出るんですけど 今日本語教育のコースも取ってるので 何か正しい日本語じゃないと
- 295 王：そう
- 296 鈴木：もし今後教えるとしたら
- 297 王：うん
- 298 鈴木：教えたいなら ちょっと関西弁を教えるのも悪いから
- 299 王：そうそう
- 300 鈴木：はい標準語も練習したいなと思って
- 301 王：そう

##### 発話299の問題：

鈴木は関西の出身で、自分が将来日本語の先生になったら外国人に関西弁を教えるのは悪いという鈴木の主観的な考えに対して、王は発話299で「そうそう」という相づちを打っている。大浜(2006)によると、「そうそう」というのは主張型の「そう系」相づちである。この場合、王は鈴木の場合に対して同意を表す同意型「そうだね」など、または受入を表明する受入型「そうか」などを使ったほうが適切であると思われるが、「そうそう」という主張型を使ってしまっている。

##### 発話301の問題：

標準語も練習したいという鈴木の場合に対して、王は発話301で「そう」と言っている。標準語を練習したいという情報は話し手の主観的な感情で、王にとって未知な情報であることは明らかなのに、王が主張型の相づち「そう」と言ったのが最初から鈴木がこの考えを知っていたという違和感をもつと思われる。話し手の主観的感情が、聞き手にとって未知な場合に、受入型の「そう系」相づちを使ったほうが適切だと考えられる。

同じ問題点は劉と中村の会話にも見られた。

##### 会話例2 (卒業旅行の話)

- 509 中村：私の友達 うん イタリアも行った  
り イタリア行くフランス行く あ
- 510 劉：そうそう  
：(略)

513 中村：私院行くから卒業旅行行けないと  
思っ

514 劉：そう

##### 発話510の問題：

発話509は中村が友達が卒業旅行でイタリアへ行ったりフランスへ行ったりしたと劉に伝えているところである。中村の友達のことについて劉は未知であるはずなのに、発話510で「そうそう」という主張型の相づちを打ったのが適切ではない。この場合、受入型の「そう系」相づち「そうか」「そうなんだ」などを使ったほうが適切である。

##### 発話514の問題：

また、発話513の中村が大学院に進学するから卒業旅行へ行けないと思うという話し手の個人に関する話題の発言に対しても、主張型の「そう」ではなく、受入型の「そう系」相づちを打ったほうが適切だと思われる。

以上のように、学習者が聞き手となる場合に見られた問題点は、話し手の主観、聞き手にとって未知な情報を述べた発話に対して、同意型の「そう系」相づちを使用すべき、あるいは受入型の「そう系」相づちを使用すべきところで主張型の「そう系」相づちを使用してしまったことである。

#### 4.2 学習者が話し手となる場合

##### 会話例3 (劉が正式にC大生になった話)

- 66 劉：今年のほうから 何か本当に正式にC  
大の学生になったっていう
- 67 中村：へ↑そうなんだ
- 68 劉：そうですね

##### 発話68の問題：

劉は自分が今年から正式にC大学の学生になったと述べた場面である。中村の反応に劉が同意型の「そうですね」という相づちを打ったのが不適切だと思われる。この場面では、劉の話題が自分に関する情報なのに、劉から「そうですね」と言ったのが、このことは自分のことではないように思わせてしまう。主張型の「そう」「そうです」「そうなんです」などのほうが適切である。

##### 会話例4 (劉がもう一度修士課程で勉強したいきっかけとなった話)

168 劉：あのう勉強したいなあとあって ま

たここへ ここにもう一回こう

- 169 中村：うん  
170 劉：修士課程になんか出直したんだけど  
171 中村：うん  
172 劉：うん：でも まあきっかけていえば その なんだっけ えっと荷風の 永井荷風の隅田川  
173 中村：ふん：？分かんないよ 隅田川  
174 劉：「そうですね」 まあとりあえず その 江戸情緒が漂った作品なんだっけ  
175 中村：うん

発話 174 の問題：

劉は自分がもう一度修士号を取ろうとしたきっかけを中村に述べた。それに対して、きっかけになった隅田川という作品を分からないという発話 173 で中村自分が疑問を思ったことを劉に伝えている。それに対して、劉は発話 174 で同意型の「そう系」相づち「そうですね」を使った。しかし、ここは聞き手の疑問を受け入れる受入型の「そう系」「そうか」などを使ったほうが適宜だと考えられる。

以上のように、学習者が話し手となる場合に見られた問題点は、主張型の「そう系」相づちを使用すべき、あるいは受入型の「そう系」相づちを使用すべきところで同意型の「そう系」相づちを使用してしまったことである。

## 5. 考察

学習者の「そう系」相づち使用に見られた問題としては、「そう系」相づちの主張型、同意型、受入型の使用上の混乱だと思われる。学習者は主張を

表す「そうそう」を同意の意味に理解してしまっている。逆に自分のことを主張するときに、主張型の「そう系」相づちをうまく使っていない。このような使用上の混乱は、学習者が「そう」系相づちの使い分けに関する正確な知識の不足ではないかと思われる。恐らく授業であまり相づちを明確に教わっていないことと大きななかかわりがあると考えられる。

## 6. 終わりに

本研究では台湾人学習者の「そう系」相づち使用に見られるいくつかの問題を明らかにした。今後の課題として、一つ目は台湾人母語場面のデータと対照しながら研究したい。二つ目は、他の言語を母語とする学習者を対象にしたい。

## 参考文献

- 新井芳子 (2000) 「会話授業におけるコミュニケーション能力の向上について—あいづちを中心に—」『東興外国語学報』第 15 期, 187-210.  
大浜るい子 (2006) 日本語会話におけるターン交替と相づちに関する研究 溪水社  
小宮千鶴子 (1986) 「相づち使用の実態—出現傾向とその周辺—」『語学教育論叢』第 3 号 大東文化大学語学研究所  
陳姿菁 (2003) 「会話のプロセスにおけるあいづちの構造—日・台の電話会話の場合—」お茶の水女子大学大学院博士論文  
メイナード・泉子 (1993) 『会話分析』くろしお出版  
柳川子 (2003) 「台湾人日本語学習者の相づち表現—滞日経験のない上級学習者の場合—」『言語文化と日本語教育』第 25 号, 66-77 お茶の水女子大学日本語文化学会  
楊晶 (1997) 「会話における相づちの中日対照研究」お茶の水女子大学大学院修士論文

ちょう しんい／お茶の水女子大学大学院 日本語教育コース

sylviebefore sunrise@yahoo.co.jp